

# えびぞり

立川と語ろう 立川に生きよう

September 2020

Écoutez Bien Vol.37 No.426

9

奥行きのある深い「詩歌のみち」



# 立川深層 12

## は ち み せ 所沢街道八店

案内人：豊泉喜一氏

前々回で立川にある国宝、普濟寺の六面石幢をご紹介しました。今回は立川市のお宝「立川村十二景」の内「所沢街道八店」をご紹介します。「立川村十二景」は馬場吉藏という人が今から120年余前の明治38年ごろの立川村の風景を描いたものです。この「八店」の場所は立川駅北口から直線で300m、立川通りと南北通りの分岐点。この絵の店は形は変わりましたが、現在でも当時の子孫の方が飲食店を営んでおられます。

明治22年(1889)甲武鉄道(現中央線)が開通して約17年後、駅からわずか300m離れたこの八店は、砂川、小平、所沢方面への分岐点で、立川へ出入りする人や荷馬車の馬方などの休憩場所であり、往来する人々の休憩場所でもありました。この絵の左下にわずかに描かれている小さな流れがあります。この流れは、前にご紹介した七軒家、八軒新田を開拓した芋窪新田用水から分水した小川で、ここから現在のJR立川駅の西地下道付近まで流れ左折していました。この水を線路際にあったタンクに汲み上げて甲武鉄道の蒸気機関車に供給するため掘られた分水です。一説によるとこの分水によって立川駅は北口が開設されたといわれています。

大正11年(1922)立川飛行場が開設され、八店のあるこの分岐点西側に立川飛行場正門が出来て、この付近は大変賑やかな場所になりました。飛行場出入りの関係者や軍人たちのため、「飛行羊羹」「飛行最中」などの土産物や、記念写真を撮る写真屋、飛行場前郵便局もできました。戦後、飛行場はアメリカ軍に接収され極東地区の補給基地になって、この付近は米兵相手の横文字の店が立ち並び景観が一変した時期もありましたが、基地の返還に伴い跡地利用が進んで業務地区として整備が進み、今ではかつてここが飛行場の入り口であった片鱗も見られません。

平成3年旧飛行場の正門前に中央の通路を挟んで、左右に立川市制50周年を記念して、「憩いの場」という小公園が作られました。右側に市章をイメージした五角形のすり鉢状の池と、噴水が設置されていたのを覚えていらっしゃいますか？噴水のしぶきが周辺ビルにかかることで、あまり使われることもなく噴水は廃止されました。現在噴水の跡は埋め立てられ芝生になっていますが、今もかつての噴水跡の五角形は残っています。この噴水の奥に最初に紹介した「立川村十二景」が陶板で展示されています。さらに旧「八店」の前近くに立川教育振興会が、平成18年に建立した「立川小唄の記念碑」もあります。憩いの場の奥に進むと、基地跡地再開発で整備された、中央図書館、女性総合センター、ホテル、商工会議所など様々な機関が林立し、立川市のビジネス街になっています。このフェアレ立川には、世界36か国の著名なアーティストが制作した様々なアートが109点も展示されており、興味深い作品が沢山見られます。機会がありましたら「憩いの場」と共に芸術鑑賞などいかがでしょうか。

立川深層は今月が最終回です。豊泉さんは今年90歳になられました。多方面からの執筆や講演をこなされています。お忙しい中、1年間ありがとうございました。



八店のあった場所(現在)



憩いの場(現在)

# 「動く」ことで未来を拓く

## 立川からアートを世界に

いつも話のネタは尽きない。  
こんなに動いていて疲れないのだろうか。  
「最近はお昼寝なんてしちゃうのよ」と言われて、なんだかちょっとホッとした。

—前回と言ってもだいぶ前になりますが、  
えくてびあんのインタビューコーナーにご登  
場いただいたのは2004年1月号でした。

**しおみ** そうでした。ヨネヤマママコさんと  
シェーンベルク作曲「月に憑かれたピエロ」  
を東京藝大新奏楽堂で再演するというので  
取り上げていただきました。

—しおみさんはプロデューサーという肩  
書ですが、驚くのはものすごく上手にメデ  
アに登場すること(笑)

**しおみ** それはやっぱり経験。テレビ局や  
大手広告代理店で積んできたものに、フリー  
になってから音楽プロデューサーとして小さ  
なイベントからサントリーホールでやるよう  
な大きな演奏会まで経験してきていますから  
(笑)。何事も積み重ねですよ。け・い・け  
ん(経験)。

—7月15日にオープンした「そのこギャラ  
リー」も、オープン初日の各社朝刊にずら  
っと記事が並びました。

**しおみ** うちのガレージを改装した狭い  
ギャラリーだけど、記者さんたちがとても気  
持ちは込めて書いてくださって、本当にあり  
がたかったです。オープンの日は、昨年急  
逝したさとうそのこさんの誕生日だったの。  
立川が生んだすばらしいアーティストだから  
ね、そのこワールドを再現したかった。

—そのこギャラリーは富士見町ですが、  
柴崎町にあるアーティストスタジオ  
LaLaLaもまた独創的な空間ですよね。

**しおみ** 両方とも詩人で画家で大工さんの  
成田ヒロシさんが作ってくれたの。

—ええ、成田ワールドは一目でわかりま  
す。

**しおみ** すてきでしょう? 恵夢のお店も成

田さんが内装してくださったのよ。

—富士見町にあるイタリアン「NaNairo  
PasTa」ですね。最初、シェフがしおみさん  
の息子さんだとは思いませんでした。一致し  
ない。落ち着いていて寡黙で…。

**しおみ** まったくしっかりした息子に育ちま  
した(笑)。親よりしっかりしている。どうし  
てあんなにしっかり育っちゃったんだろう。

—どうしてって、そう育てたんでしょ  
(笑)? ところで、しおみさんの多岐に亘る  
活動のひとつ「できることをできるだけプロ  
ジェクト Let's Do What Can Be Done」は  
本当に大きな広がりを見せていますね。昨  
年3月にはその作品集「地球は円い」を発刊  
されました。

**しおみ** 本当に多くの方が協力してくださ  
っています。東日本大震災による津波被害。  
テレビから流れる映像は、この世のもの  
とは思えなかった。私たちに何ができるだ  
ろうと考えていたところに「楽器支援」の話  
が届いたんです。夫が音楽家ですから、それ  
なら私たちにもできるとすぐさま夫と二人で  
動きました。ここでも過去にアフリカのザ  
ンビアに楽器を支援していた経験が功を奏  
して、あっという間に全国から300もの吹奏  
楽で使う楽器が届きました。

—それをメンテナンスしてお届けしたんで  
すね。

**しおみ** そうです。するとこの活動を知  
ったサントリーホールから「サントリーホール  
として何かできることはありませんか」と連絡  
がきて、そこで2012年夏、サントリーホ  
ール大ホールで「みちのくウインド・オーケ  
ストラ」として子どもたちのための大音楽会  
を開催するに至ったのです。

—えくてびあんでも聴かせていただきまし  
た。あの時、「できることをできるだけプロ  
ジェクト」の作品がサントリーホールのエント  
ランスに飾られましたよね。

**しおみ** あの時はまだタペストリーは77枚  
しかできていなかったんです。それでもエン  
トランスホールに飾ったら壮観でしたね。

—どのタペストリーにも震災で被災した  
着物のハギレが使われているそうですね。

**しおみ** そうです。楽器支援を通して石巻  
で知り合った呉服屋さんがあって、商品だ  
った着物が全部被災しヘドロまみれになり  
ました。石巻を訪れこの呉服屋さんの「被災  
着物」たちと出会うことになり、これをむざ  
むざ捨てるのは忍びないということで、着  
物のヘドロを取り除いて何度も何度も洗っ  
て、ほどいて舞台衣装にリメイクし、音楽  
家たちがこの衣装を身に着けて演奏。「震  
災を忘れない」というメッセージを送り続  
けてきました。

衣装を作るとハギレが出るんですよ。そ  
のハギレも津波の記憶の断片なので捨てら  
れず、それを「パッチワーク5×5NEXT」の  
活動につなぎました。それがこのタペスト  
リーです。このタペストリーを作る活動は「ち  
くちくきのワークショップ」と言っています。  
年齢や国籍、性別関係なく、誰もが参加で  
きる震災の記憶を伝える活動です。

—この活動に参加してくださった方が世  
界中にいるそうですね。

**しおみ** 世界36か国、タペストリーは  
2800枚になりました。

—すごいですね。NHKの「おはようにつ  
ぼん」に出演された時は、「1000枚を目標に」  
とおっしゃっていたのに。その2800枚は今、

### しおみえりこさん

札幌出身。ライター&プランナー、アートプロデューサー。  
ご主人はクラリネット奏者の橋爪恵一氏。多摩モノレ  
ル柴崎体育館駅すぐ近くにあるアーティストスタジオ  
LaLaLaを拠点に、あらゆるジャンルのアートを結  
び付けたり繋いだりしながら、新しい何かが生まれるの  
を楽しんでいる。一人息子の恵夢くんの手を引いてヨー  
ロッパ、アジア諸国を旅してまわり、小学4年になり  
少年野球を始めた恵夢くんから「もう僕を旅に誘わな  
いでください」と言われてからは更に楽しい一人旅。国  
境なき楽団が集めた楽器を持って夫がザンビアを訪問。  
音楽指導した時から庄野真代さんとの交流が深まる。  
LaLaLaにうかがう度、その道のプロが普通にお茶を飲  
んでいてとても不思議。この日のピアスは、被災着物の  
ハギレを編んだもの、自作。

柴崎町のLaLaLaで保管されているんです  
ね。LaLaLaがまた不思議な空間です。

**しおみ** アーティストスタジオLaLaLaは  
出会いの場という位置づけですね。昔パリで  
ピカソとかジャンコクトーとか、若い芸術家  
たちがサロンで出会って新しい芸術が生まれ  
ていった時代がありました。そのような場所にな  
ってほしいなと思っています。

—お話をうかがっているだけで目が回  
ってしまうほどの行動力なのですが、しお  
みさんがよくおっしゃることの中に「とにかく  
動くこと」という言葉があります。

**しおみ** 動かなければ始まらない。父が私  
のしたいことをやらせてくれる人でしたし、  
ガールスカウトに入っていて自立した精神を  
持っていたし、この行動力は幼いころから  
身につけてきたもので、子どもの頃の育ち  
方というのはやっぱり大きいと思いますね。  
動くということが次につながると体感してい  
る、というんでしょうか。動くことに理屈は  
ないです。

—しおみさんは、動きが速いんですよ。  
いろいろなことをあつという間にやる。先日  
も「ピアノは歌う ピアノは語る」の第1回谷  
川賢作さんのコンサートに行かせていただ  
きましたが、時間の無い中、サクッとチラ  
シ作って。

**しおみ** いろいろなところに「Do」と入れて  
いるのは、動こうよというメッセージなんで  
す。頭ではなんでも言える、だったら言った  
人がやって、ということですよ。

—できる人が周りに集まっているというイ  
メージです。

**しおみ** 今はできる時代ですよ、やる気さ  
えあれば。昔のように、印刷ひとつとっても

写植の時代じゃな  
いんだから。ツ  
ールがいっぱいあ  
って、情報だつて  
すぐゲットでき  
て。私たちの若い  
頃は比較になり  
ないです。でも、  
いまだに口では  
言うけれど動  
かない、そんな  
人、山のよう  
にいますよ(笑)。  
—動くことはわ  
かりました。動  
いていくうちに  
いろ

いろな人と出会って、そこから道がついて  
いくこともわかりました。

**しおみ** 私の信条として「自然の流れに任  
ず」というものもあります。無理にはやらな  
い。ですからそれほど積極的ではないん  
ですよ、本当は。なぜなら必要であれば必  
ずそういう流れになっていくと思っているか  
ら。ただ、何かをやりたい、誰かと繋が  
たらいいと思う時、誰に相談するかとい  
うことには、嗅覚というか目利き、鋭い勘が  
なければならぬとは思っています。それさ  
え誤らなければ、自然の流れはいろいろな  
支流を飲み込んで必ず大海に辿り着く。

—そうですね。いろいろな方々がしお  
みさんの活動に参加されていますものね。  
谷川賢作さんはジャズピアニストで作曲家  
だけれど、谷川俊太郎さんの息子さんだし、  
被災着物のリメイク衣装を着て演奏される  
方々はその道のプロばかりだし。

**しおみ** LaLaLaが確実に機能していると

いうことですかね(笑)。これも多くの方  
のご協力できていることなんです。LaLaLa  
の南側には広い公園があって立川の中でも  
特別に緑の多い場所です。音楽スタジオで  
あることはもちろん、撮影にも、コンサート、  
ギャラリーとしても使っています。充実した  
キッチンではお料理教室も開いたり、パー  
ティーはよくやっています(笑)。  
—やりますよね(笑)。

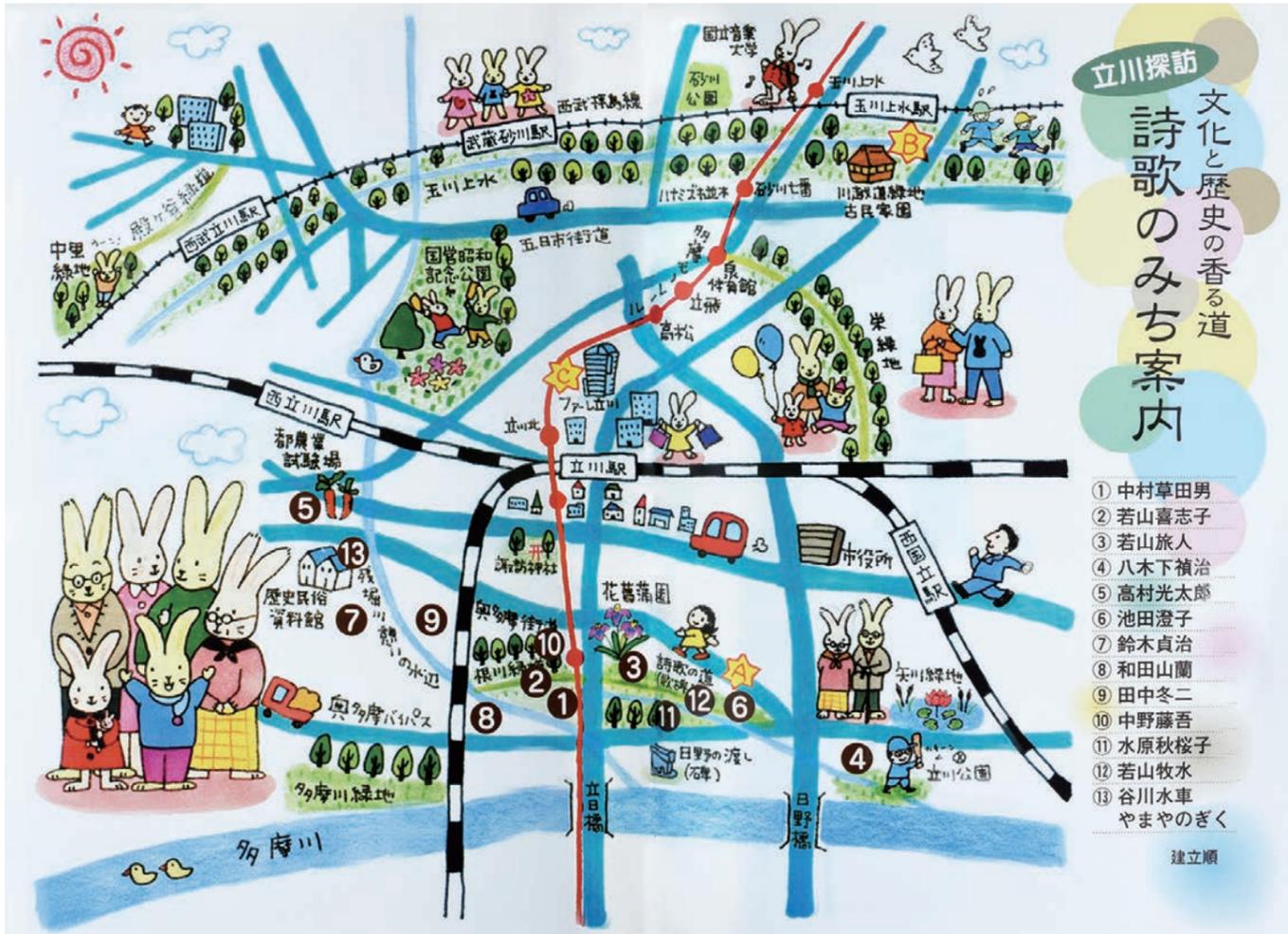
**しおみ** 「ピアノは歌う ピアノは語る」です  
が、LaLaLaにあるピアノは石巻へ一度行  
き、改めて被災地へピアノをとどける会から  
届いたピアノです。多くの人に弾いて、聴い  
てもらいたい。そう願って、プロジェクトに  
心を寄せてくれたピアニストたちの演奏を企  
画したものです。

—LaLaLaでは取りまきらなくなった被災  
着物のハギレタペストリー、立川でも2800  
枚展示できるといいですね。

**しおみ** そうできるように、また動きます!



「詩歌のみち」谷川水車著 より



立川探訪  
文化と歴史の香る道  
詩歌のみち案内

- ① 中村草田男
  - ② 若山喜志子
  - ③ 若山旅人
  - ④ 八木下禎治
  - ⑤ 高村光太郎
  - ⑥ 池田澄子
  - ⑦ 鈴木貞治
  - ⑧ 和田山蘭
  - ⑨ 田中冬二
  - ⑩ 中野藤吾
  - ⑪ 水原秋桜子
  - ⑫ 若山牧水
  - ⑬ 谷川水車  
やまやのぎく
- 建立順



# 奥が深い「詩歌のみち」

## 立川文化の功労者

今は昔と言いますが、ほんの十数年前に起こっていたこと。  
そこに尽力した人たちの影も形も見えないのは、とても寂しいこと。  
浅い歴史の掘り起こしこそ、えくてびあんの仕事かなと。

某新聞総合販売所さんが出しているコミュニティ紙にこう書いてありました。——緑が生い茂る緑地内に入ると、入口近くには句碑があり、「春を待つ路傍の石の一つ吾 水車」、「どこよりも小学校のさくらかな やまやのぎく」と刻まれていた。傍らにある案内板によると、兩人とも立川市民俳句会で尽力された方々だそう。

谷川水車さんとやまやのぎくさんはご夫妻で、谷川水車さんが仲間の俳人とともに昭和三十三年に作った立川市民俳句会で活躍された方々。そして水車さんは約3kmの「詩歌のみち」文学碑建立に尽力した人。

「詩歌のみち」文学碑建立に一番ちからを尽くしてくれたのは、五十嵐栄治さんと三田鶴吉さんだと水車さんは著書「詩歌のみち」でおっしゃっています。さらに当時立川市長だった青木久さんがいなかったら「詩歌のみち」はできなかったかもしれないと。多くの方の協力で「詩歌のみち」は立川市が推奨する散歩道となりました。歩きながら文学に触れることができる散歩道。十三の文学碑に掲げられる人々はみな、現代の立川と深い縁のあった方々。戦後まもなく立川に移り住み、基地時代を経てどんどん変わる立川を見て水車さんはおっしゃいます。「なまじつか立派な文化遺産のないところであるから、コスモポリタンな市民が活躍するのでは」と。一九九一年から「詩歌のみち」建設に努め、二〇〇一年までに十三基を建立。建立の度に除幕式をしましたが、二〇〇一年九月八日の完成除幕式には多くの市民が参集、祝意を表したと月刊えてびあんの二〇〇一年十月号に記してあります。



谷川水車さん (本名 谷川清さん)



やまやのぎくさん (本名 谷川ひささん)



若山喜志子さん 若山牧水夫人で、晩年は息子の旅人さんと富士見町にお住まいだった。

### 詩歌のみち 文学碑

- |             |    |     |          |
|-------------|----|-----|----------|
| 中村草田男       | 句碑 | 建立者 | 萬緑社      |
| 若山喜志子       | 歌碑 | 建立者 | 草野忠正     |
| 若山旅人        | 歌碑 | 建立者 | 三田鶴吉     |
| 八木下禎治       | 歌碑 | 建立者 | 五十嵐栄治    |
| 高村光太郎       | 詩碑 | 建立者 | ライオンズクラブ |
| 池田澄子        | 歌碑 | 建立者 | 初道良一     |
| 鈴木貞治        | 句碑 | 建立者 | 矢島真治     |
| 和田山蘭        | 歌碑 | 建立者 | 猿渡敬子     |
| 田中冬二        | 詩碑 | 建立者 | 豊泉喜一     |
| 中野藤吾        | 歌碑 | 建立者 | 鈴木蘭郎     |
| 水原秋桜子       | 句碑 | 建立者 | 鈴木栄一     |
| 若山牧水        | 歌碑 | 建立者 | 石田隆一     |
| 谷川水車・やまやのぎく | 句碑 | 建立者 | 中野隆右     |



若山喜志子の碑と若山旅人さん



除幕式のひとつ 豊泉喜一さんと鈴木蘭郎さんの姿が見える



除幕式は何度にも亘ったが、そのひとつ。水車さんと五十嵐栄治さん (右)

※句碑の詳細などは多摩てびネット「街情報」あるいは月刊えてびあんのバックナンバー2001年10月号をご覧ください。



## 第一デパートの鉄生堂



[立川の風景 昭和色アルバム その5] 55ページ (写真：サビアコーポレーション)

今は32階建てのマンションになっているが、それ以前ここには第一デパートがあった。前号で話したように寿屋もここに入っていた。その4階に鉄生堂という大きな本屋があった。小さな「町の本屋」がほとんどだった時代、フロア全体にたくさん本を並べていたのは、立川では鉄生堂だけだったんじゃないかな。

高校に入って最初に友達になったのは学校のある地元武蔵村山のやつで、ある日「たけちゃん、これから立川へ帰るんだろ？ オレ、立川の駅に用事があるんだけど付き合ってくれよ」と言うもんだから、「あ、いいよ」と言った。そいつは着替えて、2人してチャリで立川まで来て、第一デパートの4階にある鉄生堂へ行った。そいつはバッグから図書券の束を取り出した。それはたぶん入学祝いに親戚やなんやらから「参考書でも買ってほしい」ともらったものに違いなかった。で、そいつが図書券の束で買ったのは「激写 135人の女ともだち」という写真集だった。篠山紀信が当時人気のお姉さんたちを激写して、男性向け総合誌『GORO』に掲載していたものをまとめたものだ。135人も載っているのだから、当時の男子にとっては垂涎の1冊だった。それをそいつが図書券で買ったのを見て、すげえ羨ましいなと思う反面、こいつそんなのに使っていいのかなとも思ったり。

20余年経ってから、「オレが持ってるよりたけちゃんの方が価値が出る」と言って、この本をオレにくれた人がいる。だから、今、オレはこの本を持っているのだ。